

市民活動・NPO 研究の課題(3)

——世田谷プレーパーク活動を事例として——

首都大学東京 小山弘美

1 目的

本報告の目的は、市民活動・NPO 団体と地縁組織との連携状況を捉えると同時に、その問題点を抽出することである。地域で活動する市民活動・NPO にとって、地域に伝統的に存在してきた町内会・自治会を中心とする地縁組織との協働は課題とされてきた(越智 1990、辻中他 2012)。しかしながら、市民活動・NPO と地縁組織の協働を扱う研究では、地縁組織から派生したテーマ型の活動が取り上げられることが多く(今野 2001)、自生してきた市民活動・NPO と地縁組織の連携状況が取り上げられることが少ない。そのため、地縁組織とは担い手が異なり、特定の目的を持った市民活動・NPO が、地域の中でどのように協働関係をつくっていくのか明らかになっておらず、市民活動・NPO と地縁組織の協働は、常に課題として提示されるだけにとどまっている。重要な研究課題は、いかにして協働状況をつくることができるのかを明らかにすることである。そこで、長年地域においてテーマ型の活動を行ってきた事例を取り上げ、地域での連携状況を経年的に追うことによって、その特徴と課題を抽出することにする。

2 方法

本報告では、東京都世田谷区で活動を展開する「NPO 法人プレーパークせたがや」を事例として扱う。プレーパークせたがやは、1975 年に冒険遊び場づくりのための「遊ぼう会」として誕生した。その後、コミュニティ行政全盛の世田谷区の支援を受け、常設のプレーパークの設置し、現在では区内 4 つの常設箇所を設けており、全国にも活動が広がっていく起点となってきた。この 30 年以上にわたる活動について、団体自体がこれまで刊行してきた書籍や報告書等から、その歴史的な活動状況について把握する。特に 2005 年の NPO 法人化以降の状況の変化については、NPO 法人の常勤職員や長年ボランティアでかかわってきた近隣住民である「世話人」に聞き取り調査を行う。

3 結果

プレーパークせたがやの他団体との協働は、はじめからうまくいっていたわけではなかった。学校からは不良のたまり場のような扱いをされたこともあり、また、周辺の住民からもさまざまな苦情を受けてきた。しかし、それら一つひとつに地域住民である「世話人」を中心に、真摯に対処してきた。さらに、率先して PTA 役員などを担い、地域で認められるようになっていった世話人への信頼が、活動への信頼に変わっていったのである。町内会・自治会には当初から会議やイベントへの参加を呼びかけ、関係づくりに努めてきた。現在では、30 年来の地道な活動が認められ、町内会・自治会のイベントに協力を要請されるなど、協働関係にある。特に注目すべきは、プレーパークの世話人が町内会・自治会の担い手として期待されていくという点である。しかしながら、次世代の担い手不足はプレーパークせたがやにおいても同様に課題である。運営を担う世話人の多くは、プレーパークに通う子どもの母親たちであるが、仕事を持つ母親が増える中で、世話人を引き受けるほど、活動にのめりこむような状況が見られなくなってきた。一方で、従来の地縁組織が持つ課題と異なる点は、主に常勤職員の給与を中心とする活動継続費用である。

4 結論

30 年の歴史を重ねた市民活動・NPO の事例から、町内会・自治会を中心とする地縁組織との協働関係を築くには、担い手が他の活動に対しても関わりをもつことが重要であることがわかる。その結果、市民活動・NPO の担い手が、地域の担い手となっていくのである。地域の担い手として、地縁組織と市民活動・NPO では、同様の課題と異なる課題を抱えていた。この点で、地域組織全体を取り巻く課題と、市民活動・NPO が抱える特異な課題を識別することが、地域の協働を考えるうえでも重要となると考えられる。